VISIT…

LANZAROTE Caliente.COM

Bill Evans:Rare Transcriptions 2

Song	Recording
1..I Hear A Rhapsody(with Jim Hall)	Undercurrent
2.Skating In Central Park	
3.Night And Day(with Stan Getz)	Stan Getz & Bill Evans
4.Green Dolphin Street(with Miles Davis)	1958 Miles
5.Flamenco Sketches(with Miles Davis)	Kind Of Blue
6.Autumn Leaves(with Jeremy Steig)	What's New
7.You And Night And Music	Green Dolphin Street
8.Summertime	How My Heart Sings
9.My Foolish Heart	Turn Out The Stars
10.Round Midnight	Bill Evans Trio Live
11.Goodbye	Autumn Leaves
12.Danny Boy	Bill Evans Solo
13.Never Let Me Go	Alone

“I Hear A Rhapsody”

★ギター：ジム・ホール／★ピアノ：ビル・エヴァンス

Jim Hall(g) & Bill Evans(p)

●採譜と解説：布川俊樹(ギター)、及川かほる(ピアノ)

そうして“インタープレイ”は生まれた

『コンプリート・アンダーカレント／ビル・エヴァンス＆ジム・ホール』
(東芝EMI　CD：TOCJ-5354)

ぼくは、自分が死んだ時に葬式でかけてもらいたいな、と思う音楽がふたつあります。マイルスの『マイ・ファニー・ヴァレンタイン』と、この珠玉のデュオ、『アンダーカレント』です。ジャズ・ギター・アルバムでは、ウェスの『ハーフ・ノート』と、ジョン・スコの『ライヴ77』、そしてこの作品がぼくにとってのベスト3でしょうか。とにかく、この作品ほど情感溢れるギター演奏をぼくは他に知りません。哀しみ、冷たいリリシズム、強さ、ストイックとも言える抑制力、このアルバムの印象をあげていくときりがありません。その中でも最も強く感じることは、彼らの美意識とそれを徹底的に遂行する意志です。ふたりの意志のエネルギーの強さが、あの張り詰めた緊張感ある“時空”を生み出します。「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」を除くと、ほとんどバラッドっぽい曲ばかりで、普通だったらかったるくなるところ。しかし、彼らの演奏は、スロー・テンポやルバートでもビートがビシッと決まっていること、ふたりとも、徹底的に自らの置かれている状況とそれに対する行動が見えている（要するにさめている）こと、プレイのスピード（手が速く動くということではなく、瞬発力ということ）の速さなどから、まったくだれた感じがしません。その中でもLPの最初の3曲（A面にあたる）は、完璧です。「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」の信じられないほどの緊張感ある演奏が終わった後で、同じキイの「アイ・ヒア・ア・ラプソディ」のテーマをジム・ホールが弾き始める瞬間、何度聴いても胸がつまります。みなさんも、もし聴いていないのなら、とにかく一度聴いてみてください。それからCDの曲順について一言。「マイ・ファニー～」のオルタネイト・テイクを1曲目に入れる神経は信じられません。あのアルバムの完璧な構成を考えたら、オルタネイト・テイクは絶対に最後の方に入れるべきでしょう。

(譜例解説)

さすがにビル・エヴァンス。実に美しいコード進行がつけられている。普通と少しちがうのは、5～6小節目、|Fm7→A♭m7|Bm7→B♭7|と短3度で上がっていく部分、15小節目の3拍目にB♭m7へ行くところだろう。ジム・ホールのフレイジングをみても、このコード進行があらかじめ決められていたことがわかる。ただ、これは、このスロー・テンポだからよいので、いわゆるミディアム、4ビートのテンポの場合、コードの動きがせせこましくなってしまうかもしれない。

ジム・ホールは、1コーラス目のテーマのAの部分をフェイク気味に、2コーラス目はサビのBの部分からソロに入り、最後のAでテーマを弾いている。短いながらも、彼の“うたい方”のエッセンスをぼくはこの演奏に感じてしまう。

〈布川〉

I Hear A Rhapsody/Jim Hall & Bill Evans

『アンダーカレント』よりギター＆ピアノ・フルコーラス・スコア

A

E♭maj7　G○　Fm7　B♭7(♭9)　E♭maj7　A♭7

Gm7(♭5)　C7(♭9)　A♭maj7　A♭m7　Bm7　E7　E♭maj7

9

G7(♮13 ♭5) Cm7 G♭7 Fm7 B♭7 E♭maj7 A♭7

13

sweep sweep sweep

Gm7(♭5) C7(♭9) Fm7 A♭m7 D♭7/A♭ Bm7 E7

E♭maj7 / B♭m7 E♭7/B♭ Am7 Am7(♭5) D7 Gm

Cm7 D7(ALT.) Gm Cm7 F7 C♭maj7

24

B♭maj7 Fm7 Dm7(♭5) G7 G7(ALT) D♭7+

25 sweep

Cm7 G♭7 Fm7 B♭7 E♭maj7 A♭7 Gm7(♭5) C7(♭9)

29

Fm A♭m7 Bm7 B♭7(♭9) E♭maj7 G7

Evans P.Solo

E♭maj7 G♭7 Fm7 B♭7 E♭maj7 A♭7 Gm7(♭5) C7(♭9)

Fm7 A♭m7 D♭7 | Bm7 B♭7 | E○7 E♭maj7 A♭7 | G7 F7 E♭7 D♭7

Cm7 G♭7(♭9) | Fm7 B♭7 | E♭maj7 A♭7

Gm7(♭5) C7 | Fm7 A♭m7 | Bm7 B♭7

E♭maj7 B♭m7 E♭7 | 48 Am7(♭5) D7(♯9)

B 49 50 slide 51 52

Gm Cm D7(♭9) Gm7 Cm7 F7 F7+

56 A 57

B♭maj7 Fm7 Dm7(♭5) G7 G7 (whole tone) Cm7 G♭7

cho 60

Fm7 B♭7 E♭maj7 B♭/A♭ Gm7(♭5) C7(♭9) Fm A♭m7

Rubato→ 64

Rubato→

Bm7 B♭7 A♭maj7 Gm7 Fm7 E♭maj7

ニューヨークを題材にした名曲　その2

Skating In Central Park

スケーティング・イン・セントラル・パーク／ビル・エヴァンス(p)＆ジム・ホール(g)

採譜：石澤功治（ギター）＆松井玲央（ピアノ）
解説：石澤功治

ニューヨークに因んだ曲ということで、「A列車でいこう」に続く第2弾はビル・エヴァンス(p)とジム・ホール(g)のデュオによる1962年の大名盤『アンダー・カレント』から。作曲はMJQのジョン・ルイス。ピアノとギターの巨匠ふたりが、しっとりと、それでいてメリハリのあるワルツに仕上げている。冬のセントラル・パークの美しさを叙情的に表現し、加えて3拍子に乗って滑らかにスケートしている様を連想させる見事な演奏だ。

曲は64小節で1コーラス。イントロ4小節に続いてA～Dがギターによるテーマ、Eからがアドリブとなっている。譜面は、誌面の都合上アドリブの1コーラス目までとなっているのでご了承いただきたい。なお、コード・ネームはバッキングを担当している楽器の上に記した。

Guitar：無駄な音を一切弾かないジム・ホールのスタイルに改めて感服である。また、EとHでの豊かなヴォイシングによるバッキングも卓越。一方、アドリブでは8分ウラによる強力なシンコペーションに注目してほしい。

●

Piano：イントロはルバート的だが、ここでは2拍子で記してみた。テーマの8小節目2拍目はギターのオクターヴにも聴こえるが、ピアノとギターがそれぞれC音を弾いている。こういったところから、ふたりがプレイ前に綿密な打ち合わせをしたと思われる。Bの最後の小節はホールトーンによる音使い。Cの最後はGの上に$E^{\flat}$、$D^{\flat}$のメジャー・トライアドを乗せたアプローチ。■



収録アルバム
『アンダーカレント』
ビル・エヴァンス(p)＆ジム・ホール(g)
東芝EMI(Liberty)TOCJ-9337

Intro　Theme　A

Guitar

Piano

G7(13/11/9)　G7(9)　CM7/G　G7(♭13/♭9)　R.H.　rit.

CM7/G　G7(9)　G7(#9)　CM7(9)/G　G♭7(9)

Skating In Central Park Music by John Lewis
© Copyright by M. J. Q. Music Inc.
Rights for Japan controlled by Victor Music Publishing Co., Inc.

Skating In Central Par

F B7 Em A7 Dm7 G7

B

F/A A♯dim G7/B CM7/G G7(♭9, 13) CM7/G

G7(9) G7(♯9) CM7 G♭7(9) F B7

Em7 A7 Dm7 G7(9) CM7(9) C7aug

C

Fm FmM7/E Fm7/E♭ Dm7(♭5) E♭M7 Gm7/D

H.U H.D

Cm7(9) B♭m7 Cm Cm/B♭ Am7(♭5) D7

8va bassa

D

S

Fm Fm7/E♭ Dm7(♭5) G7 CM7/G G7(♭9 13)

CM7/G G7(9) G7(#9) CM7/G G♭7

Skating In Central Park

スケーティング・イン・セントラル・パーク

F

C6 | G7(♭9,13) | CM7(9) | | Dm7(9) | G7(♭9,13)

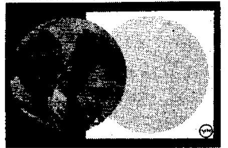
CM7 | G♭7(♭5) | FM7 | B7 | Em7 | A7

Dm7 | G7 | CM7(9) | G♭7(♭5) | G Guitar Solo~

Fm7(9) | FmM7/E

Fm7/E♭ | Dm7(♭5) | E♭M7(9) | Gm7/D | Cm7(9) | B♭m6

P
P
g
g
Cm6
Cm/B♭
Am7(♭5)
D7
Fm
Fm7/E♭
H Piano Solo~
CM7
G7(♭9, 13)/F
C6(9)/E
CM7
Dm7(♭5) Ddim
G7(♭13)
Dm7(11)
G7(♭9, 13)
CM7(9)
G♭7(♭5)
FM7
B7
Em7
A7
Dm7
G7(13)
CM7
G7



『スタン・ゲッツ＆ビル・エヴァンス』
（ポリドール　CD：POCJ-1829）

★ピアノ：ビル・エヴァンス

Bill Evans（p）

●採譜と解説：及川かほる

流れるようなピアノの単旋律

エヴァンスを聴くたびに……　この人、どうして死んじゃったんだろうなぁ……　とつくづく思う。今生きていたら、どんなプレイをしていただろう？　ほんとうに多彩なプレイを見せてくれる人で、聴き込んでいくほどにその"すごさ"を痛感してしまう。

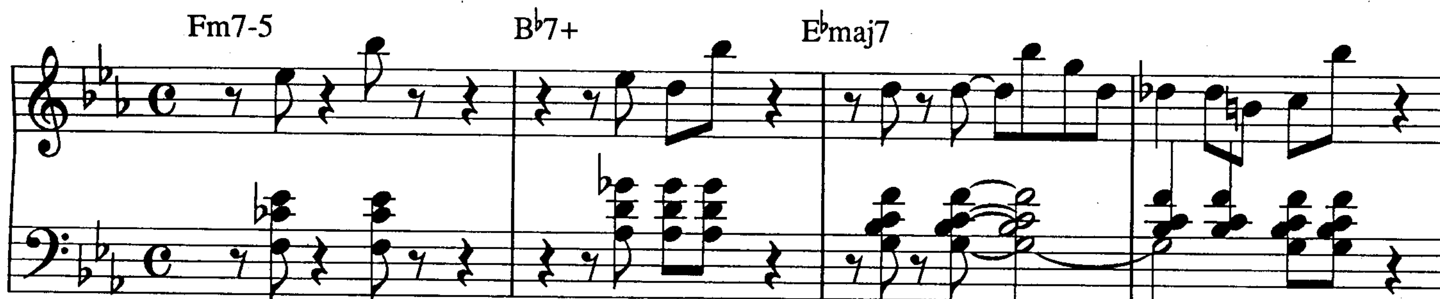
スタン・ゲッツと共演している、この「ナイト・アンド・デイ」でのピアノ・ソロは、とにかく徹底的にブレイクを使っているのがおもしろい。最初の1コーラスは、8小節ごとのブレイクを延々繰り返している。8小節ごとにバッキングがピタっと止み、ピアノの単旋律が流れるのは妙に気持ちの良いものだ。
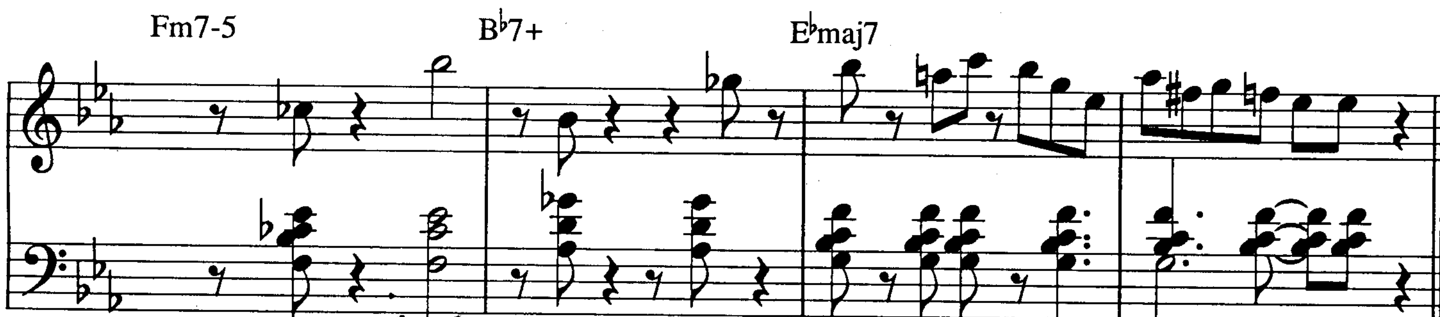
ブレイクしている間のフレイズは、聴いていてコード進行の察しがつくような、比較的インサイドなものになっている。わかりやすく言えば、コード・トーン主体の連続フレイズで、特にそのコードの3rdと7thは外さないカッチリした構成である。

それとの対比で、交互に出てくる通常のソロの部分はブロウクンだったりするが、そんな時も、軸音が順次進行していたり左手が規則的なバッキングを刻んでいたり、と、必ずどこかで流れを作っているのがわかる。

まぁ、エヴァンスのプレイに関しては、たいていどれを聴いても納得してしまうのだが、この「ナイト・アンド・デイ」でのソロも、なかなかの納得モノですょ！







Am7-5 A♭m7 Gm7 G♭dim

3

Fm7 B♭7 E♭maj7

3

Fm7-5 B♭7+ E♭maj7

Fm7-5 B♭7+ E♭maj7 E♭7

Am7-5 A♭m7 Gm7 G♭dim

3

"Night And Day"

Fm7 B♭7 E♭maj7 D♭7

G♭maj7 F♭maj7 E♭maj7 G♭maj7

G♭maj7 F♭maj7 E♭maj7 B♭m7 E♭7

Am7-5 A♭m7 Gm7 G♭dim

Fm7 B♭7 Fm7 E♭maj7

新・S月T刊AスNタDンAダR-Dド

★サックス：スタン・ゲッツ

Stan Getz(ts)



『スタン・ゲッツ&ビル・エヴァンス』
（ポリドール　CD:POCJ-1829）

●採譜と解説：佐藤達哉

ゲッツに似合うスタンダード曲

これから夏にかけて、曲名の通りのさわやかな雰囲気を持つ曲「ナイト・アンド・デイ」をとりあげるのはなかなかタイムリーだと思うのだが、コール・ポーター作になるこの曲、ヴォーカリストやピアニストによる演奏が多く残されているわりには、サックス奏者による演奏はあまり見当たらない。テナー奏者スタン・ゲッツとピアニスト、ビル・エヴァンスによる『スタン・ゲッツ&ビル・エヴァンス』や、同じくジョー・ヘンダーソンのアルバム『インナー・アージ』が思い浮かぶくらいなのだが、先月自己のクァルテット「クエスト」を率いて来日を果たし、さらに磨きのかかった「エグい」サウンドを聴かせてくれたソプラノ奏者、デイヴ・リーブマンがこの「ナイト・アンド・デイ」のコード進行をベースに、モダンなメロディを乗せて書いた名曲「デイ・アンド・ナイト」なんていうシロモノもあるにはある。ちなみにリーブマン(Liebman)のオリジナルの中には、「枯葉」のコード進行を基にして書いたレイジーな、そして美しいメロディ・ラインをもつナンバー、「オータム・リーブス」(Autumn Liebs)という曲もある。こういったぐあいに、既成の曲のコード進行を使って新しいオリジナルを作曲した場合、ジャズ・メンはかなりシャレてタイトルを付けている。思いつく例として、ジョン・コルトレーンの「サテライト」(衛星)。この曲は「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」のコード進行を基にしているのだ。同じくコルトレーンの「カウント・ダウン」。これはマイルス・ディヴィスの「チューン・アップ」を基にしているのだが、これはカウントもチューニングも演奏の直前におこなわれるというところからネーミングされたのではないだろうか？

話が横道にそれたので、本題に戻そう。今月の課題曲、「ナイト・アンド・デイ」はスタン・ゲッツの演奏をとりあげてみたい。

白人ジャズ・プレイヤーの頂点に立つふたり、スタン・ゲッツとビル・エヴァンスの唯一の共演をとらえたこの演奏は、録音後まもなく発売されたわけではなく、なんと10年間もオクラ入りをして、未発表シリーズのような形で発表されたのだ。この夢のような共演は、レニー・トリスターノやリー・コニッツ、ズート・シムズやアル・コーンらの白人プレイヤーをフェイヴァリットにする人たちにとっては、たまらない魅力をたたえたセッションといえる。単純にゲッツとエヴァンスのプレイを頭に思い浮かべてみただけで、このふたりの共演が冷たい炎を飛ばす、クールでホットな(?)演奏になるにちがいないと期待してしまうのだ。が、果たして結果はどうであったのか。

一言で片付けるには無理があるかもしれないが、良い演奏ではあるが、期待どおりというほどの名演ではなかったようだ。たった一回きりの共演で、おのおのの真価を発揮するというのはなかなか難しいことである。互いにリーダーとしての強い個性を持っているだけになおさらだ。何度かセッションを重ねるということを経た上であったなら、また別の結果になったであろう。このことは望むべくもないが。これ以外にも、ベーシストとドラマーの人選ということも問題があったかもしれない。メンバーであるロン・カーターやリチャード・デイヴィス、エルヴィン・ジョーンズらはまったく文句のつけどころのない名手たちではあるが、このゲッツ～エヴァンスという白人プレイヤーたちのコンセプトにベスト・マッチングするミュージシャンであったろうか。リズムのノリの点でもこのことはいえる。たとえばリチャード・ディヴィス～エルヴィン・ジョーンズのコンビは、『ヘヴィー・サウンズ』というアルバムにも代表されるように、重厚でそしてねばりながらも"うねる"タイプのグルーヴを表現している。一方、ゲッツ～エヴァンスは、タイトでジャストのノリでのソロを展開するタイプである。彼らのような白人ジャズ・メンの代表格プレイヤーの持ち味をほんとうに生かすのであるなら、チャック・イスラエルやエディ・ゴメス、ポール・モチアンらのような同じく白人プレイヤーを迎えた方が、一体感があったのではないかと思うのだが、いかがであろうか。

演奏自体に触れてみよう。この曲の持つムードはゲッツのサックスのスタイルによくマッチングしている。メロディの唄い方、ニュアンスのつけ方の巧みさからそれが伝わってくる。アドリブ時には８小節単位のブレイク・タイムが効果的に使われているので、メリハリが大きいソロ構成になっている。そしてＣＤには興味深いことに同曲の別テイクが追加されているのだが、はっきり言って、オリジナルと比較してあまり良い出来とは言えない。おそらくオリジナル・テイクを録音したあとに、それをキープしておいてもう１回、くらいのノリで別テイクを録音したのだろう。オリジナル・テイクの出来にとらわれてしまったのか、覇気のない演奏だ。ソロの途中、オリジナル・テイクにも使われていたフレイズとまったく同じものが唐突に出てくるのだが、たぶんこのフレイズはあらかじめ用意しておいたものだろう。ちょっと意外な感じがした。

1 (in Bb)
Gm7-5　C7　Fmaj7　Gm7-5　C7
Fmaj7　Bm7-5　B♭m7　Am7　A♭dim
Gm7　C7　Fmaj7　Gm7-5　C7
Fmaj7　Gm7-5　C7　Fmaj7

"Night And Day"

Bm7-5 B♭m7 Am7 A♭dim Gm7 C7

Fmaj7 A♭maj7 Fmaj7

A♭maj7 Fmaj7 Bm7-5 B♭m7

Am7 A♭dim Gm7 C7 Fmaj7

2 Gm7-5 C7 Fmaj7 Gm7-5 C7

Fmaj7 Bm7-5 B♭m7 Am7 A♭dim

C7 Fmaj7 Gm7-5 C7

Fmaj7 Gm7-5 C7 Fmaj7

Bm7-5 B♭m7 Am7 A♭dim Gm7 C7

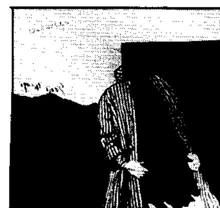
Fmaj7 A♭maj7 Fmaj7

A♭maj7 Fmaj7 Bm7-5 B♭m7 Am7

A♭dim Gm7 C7 Fmaj7 3

★トランペット：マイルス・デイヴィス

Miles Davis (tp)



「1958マイルス／マイルス・デイヴィス」
（CBSソニー（CBS）CD：32DP-521）

●解説：吉田憲司

モードの発想と"グリーン・ドルフィン"

ジャズの発展の過程での大きな流れを見ると、そのひとつはラグ・タイムからニューオリンズのディキシーランド・ジャズへ、そして白人によるシカゴ・スタイルのディキシーランド・ジャズへと受け継がれ、やがてスウィング・ジャズへと発展している。

この過程において音楽は洗練され、商業音楽としては成功した。しかし、芸術的な面での成功はデューク・エリントンなどひと握りのミュージシャン達による音楽以外は少なく、ダンス音楽の域を出ることは稀だった。

第二次大戦が終わったニューヨークの、黒人ジャズ・ミュージシャンによる新しい動きは"ビ・バップ"と呼ばれる新しい音楽を生み出し、演奏会場をクラブやダンス・ホールからコンサート・ホールへと移し広げ、ダンス音楽から鑑賞音楽へと脱皮させた。

パーカーやガレスピーのビ・バップは、バルトークやストラヴィンスキーらによる近代和声論を取り入れながら、コードとコード進行を広げることで、フレイズを発展させた。しかし、この方法はより複雑なコードとコード進行へとエスカレートし、自由なフレイジングを束縛する結果となった。

このような新しいジャズの流れの中で、ビ・バップの洗礼を受けたトランペッターがマイルス・デイヴィスである。そして、マイルスは音楽的に大きく成長し、自分のスタイルを完成させ、多くの名演奏を残すだけでなく、ビ・バップをさらに発展させる方法論を見つけ出し、成功させた。

最初に見せたマイルスの動きは、1948年秋に結成した9人編成のグループによる実験であった。ここで試みられた重厚なハーモニーと広い音域を駆使したサウンドによる演奏は、ユニゾン・メロディでジャム・セッションの延長のごとくいつも演奏されるビ・バップに対する批判であった。

次いで見せた動きは、アルバム『クッキン』の中の「ブルース・バイ・ファイヴ」のソロに見られるような"コードの中から音を選択する"のではなく、"全体のサウンドと調和するハーモニーとしての音の選択"である。そして、更にこのアイディアを広げていったのが"一定の旋法上で生じる音列から選択した音でメロディ・ラインを作る方法"であり、この方法を"モード奏法"と呼ぶ。

こうしたモード使用による演奏は、コードとコード進行の単純化により自由なメロディ・ラインによるアドリブの自由化であった。アルバム『マイルストーンズ』はこのような新しい考えによって1958年4月2日と3日に録音された。

続いて発表されたのは、7月4日のニューポート・ジャズ・フェスティヴァルのライヴ盤であり、さらに7月22日から8月18日はギル・エヴァンスとの共作『ポギーとベス』の録音を、翌年1959年3月から4月にかけては『カインド・オヴ・ブルー』を、11月20日には名作『スケッチ・オヴ・スペイン』を録音するなど、エネルギッシュに活動する。

1958年から1959年の時期は、マイルスにとって音楽上の実験と完成とのはざまにあり、演奏自体もスリリングである。

前置きが長くなってしまったが、今回取り上げる「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」は、このような時期である1958年5月26日に録音され、『マイルストーンズ』から『カインド・オウ・ブルー』への実験の途中段階での演奏である。

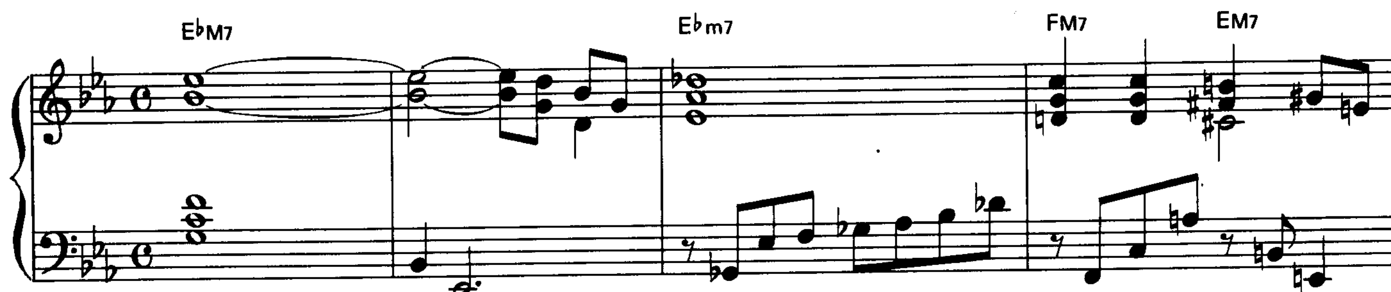
現在でも、この曲はよく取り上げられ、演奏の機会も多い。それは曲のコード進行のおもしろさであろう。例えば最初の8小節をFペダル使用にすることで、スケールの選択はより自由となり、続くGm_7／C_7～$F_\triangle$、$B^\flat m_7$／$E^\flat_7 A^\flat_\triangle$はそれぞれにスケールを組み立てる。そして曲の最後8小節をGm_7／Gm_7 on F、$Em_7^{(\flat 5)}$／$E^\flat_7$、Dm_7／Dm_7 on C、$Bm_7^{(\flat 5)}$／$B^\flat_7$、Am_7／$A^\flat_7$、Gm_7／$G^\flat_7$～$F_\triangle$とIIm_7／V_7を変化させることでクロマチック・コードが使用でき、フレイズを広げることができる。

スタンダードと言われる曲の中では、モードを使用するのに適していない曲も多いが、この「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」はそのような中でも、最もモードに適した曲かもしれない。

Miles Davis (tp) & Bill Evans (p)

『1958マイルス』より

●採譜：及川かほる



"On Green Dolphin Street"

EbM7 /Gm7(b5) C7(b9) Fm7 Bb7+ EbM7 Bbm7 Eb7(b9)

Abm7 Db7(Alt) GbM7 Bb7 EbM7 GbM7

FM7 EM7 EbM7 C7(Alt) FM7 G7(Alt) Cm6 F#o7

EbM7 GbM7/Eb FM7/Eb E/Eb (EM7/Eb)

EbM7 Bbm7/Eb Am7/Eb Abm7/Eb

Tp. solo（2コーラス目）

FM7 Fm7

G/F G♭/F FM7 D7

Gm7 C7 FM7

B♭m7 E♭7 A♭M7 Gm7 C7

FM7 Fm7

G/F G♭/F FM7 D7

Gm7 Em7 A7 Dm7 G7(♭9)

Am7 D7 Gm7 C7 Am7 D7 Gm7 C7

Am7 D7 Gm7 C7 FM7

"On Green Dolphin Street"

Piano solo（1コーラス目）

E♭M7 E♭M7

E♭m7 FM7/E♭ EM7/E♭

E♭M7 C7(Alt) Fm7 B♭7(♭9)

E♭M7 B♭m7 A♭m7

D♭7 G♭M7 B♭7(Alt) E♭M7

E♭m7 FM7/E♭

EM7/E♭ E♭M7 E♭7 Dm7(♭5)

G7(Alt) Cm7 F7 Gm7 C7(♭9)

Fm7 B♭7 E♭M7 B♭7

後テーマ⇨Tp.(in B♭)

FM7 FM7

Fm7 GM7/F G♭M7/F

FM7 Gm7 C7

"On Green Dolphin Street"

FM7 Cm7 F7 B♭m7 E♭7

A♭M7 Gm7 C7 FM7

Fm7 GM7/F G♭M7/F

FM7 C7 Gm7 Gm/F Em7(♭5) A7

Dm7 G7(♭9) Am7 D7 Gm7 C7

Am7 D7 Gm7 C7 Am7 D7 Gm7 C7

FM7 E♭/F D/F D♭/F FM7

Fm7 F○7 Gm(♭5)/F FM7

名演を探せ！

FLAMENCO SKETCHES
MILES DAVIS

禁欲的なまでの歌い方こそ美しい

マイルス・デイヴィスの『カインド・オヴ・ブルー』である。あまりの名盤ゆえに〝この名演を探せ〟でとりあげるのも、ちょっとばかりはばかられるが、ＣＤで発売された（９月21日発売）ことでもあるし、ここでその魅力を再確認してみることにする。

このアルバムの売り文句にあるのが、マイルスの〝モード奏法の導入〟ということだが、アルバム全部がモード的であるわけではないことをいっておこう。例えばA②「フレディ・フリーローダー」はウィントン・ケリーのファンキーなピアノが魅力のブルースだし、「ブルー・イン・グリーン」もそのコード進行をながめるなら決してモードという言い方はできない。中で明らかにモードと言えるのは、A①の「ソー・ホワット」だ。ＤドリアンとE♭ドリアンの繰り返しのうえでの演奏は、〝モード〟というものが単にスケールのことではなく、その演奏者に新たな空間を与える、あるいは聴き手にそう感じさせる力を持っているものであることが分かるだろう

そして今回とりあげた「フラメンコ・スケッチズ」だが、かなりクラシック色の強いオスティナートのうえでアドリブを繰り広げる、という内容で、モードというい方も可能だが、特にモード、モードと大さわぎするほどのこともないようにも思える（これ以降のマイルスのモードの発展のさせ方を考えると、この曲のアプローチはモードという意味はそれほどない、ということ）。というわけで、ここではマイルス～コルトレーン～エヴァンスによる押えのきいたリリカルなソロにこそ耳を傾けてほしい。この美しさこそが、実はこのアルバムの最大の魅力なのだ。ということが分かってもらえると思う。

「カインド・オヴ・ブルー」
ＣＢＳソニー(CD:32DP513)

©1959 WARNER-TAMERLANE PUBLISHING CORP.All Rights Reserved Used by permission
Rights for Japan administered by WARNER BROS.MUSIC(JAPAN)INC.,% NICHION, INC.

名演を探せ!
FLAMENCO SKETCHES
MILES DAVIS

D7 Cm7(♭5) D E♭M7/D D Cm7/A D E♭/D D E♭/D

D E♭M7/D D7(#9, ♭13) Gm7 B♭M7/C FM7/G CM7 <T. Sax.> FM7/C — G

CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G Cm7(♭5) E♭m7 A♭/E♭ G♭M7/A♭ D♭M7/A♭ Cm7(♭5)/A♭ A♭7 E♭7

G♭/A♭ A♭7/F B♭M7 E♭M7/F B♭M7 E♭/F/E♭ B♭M7 E♭M7/B♭ — F D E♭M7/D

D E♭M7/D D E♭M7/D D D7(#9, ♭13) Gm D E♭M7/A♭ D7 E♭M7/A♭

D7 D7(♭13) Gm Dm7/G Dm7 Gm Gm7 Am7/G Gm Am/G — D

Gm7 CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G

CM7 FM7/C — G CM7 FM7/C — G CM7 E♭o7 A♭7 E♭m7 A♭7

A♭7sus4 A♭7sus4/E♭ A♭7 B♭M7 F7sus4 B♭M7 Cm7/B♭ — F B♭M7 Cm7/B♭ — F

B♭M7 F7 B♭M7 E♭M7/B♭ Dm/A

D E♭M7(♭5)/D D E♭M7/D D E♭M7/D D7

D E♭/D D D7(♭9,♭13) Gm/D B♭M7/D Dm7 Em7(♭5)/D Gm7 Am7/G B♭/D Dm7/G

名演を探せ！ リクエスト募集

Edited by Foxit Reader
Copyright(C) by Foxit Software Company,2005-2008
For Evaluation Only.

flute
p.f.
bass

Cm7 F7 B♭M7 E♭M7 Am7(b5) D7 Gm Cm7 F7 B♭M7 E♭M7

Am7(b5) D7 Gm Cm7 F7 B7° E7 E♭M7

A7(b9) D7(b9) GmM7 Gm6 Cm7 F7

B♭M7 B♭7(b9) E♭6 Am7(b5)(b9) D7(b9) Gm6 GmM7 Gm6

A7 D7 GmM7 Gm6 GmM7 Gm Cm7 Cm7/F F7

B♭M7 A°7 D7(♭9) Gm6 D7(♭9) Gm7

A7(#9) D7(#9) Gm

gliss

gliss.

Bass Solo

Cm7 F7 B♭M7 Am7(♭5) D7

<Pf>

<Bass>

Gm G7 Cm7 F7 B♭M7

Am7(♭5) D7 Gm Am7(♭5) D7

名演を探せ！

枯葉 Autumn Leaves

ビル・エヴァンス Bill Evans

Gm G7 Cm7 F7 B♭M7

Am7 (♭5) D7 Gm/D A7 D7

Gm G7 Cm7 F7 B♭M7

Am7 (♭5) D7 (♭9) Gm G7 Cm7 F7

B♭M7 E♭M7 Am7 (♭5) D7 Gm

Am7 (♭5) D7 Gm G7 Cm7 F7

You And The Night And The Music

あなたと夜と音楽と

Words by Howard Dietz／Music by Arthur Schwartz

A Cm6(9) | Dm7(♭5) G7(♭13) | C7(♭9) C7(♯9) | Fm(add9)

Dm7(♭5) | D7(♯9) G7(13) | C6 | Dm7(♭5) G7

A' Cm6(9) D7(♯9) | G7(13) | C7(♯11 ♭9) C7 | Fm6

Dm7(♭5) | D7(♯9) G7 | C6(9)

© 1934, 1949 WARNER BROS. INC.
All Rights Reserved Used by permission
Rights for Japan administered by WARNER BROS. MUSIC (JAPAN) INC., c/o NICHION, INC.

B A♭7(13) G7(13)

A♭7(13)

18 G7(13) A♭7(13) G7(13) G7(♭13) A" Cm(add9)

G7(♭13) 3 3 C7 Fm6 to Φ Dm7(♭5) Cm

3

Cm/B Cm/B♭ Cm/A A♭7(13/9) G7(13/9) Cm6(9)

1st Improvisation

A Cm Dm7(♭5) G7 C7 3 Fm

Dm7(♭5) 3 G7 C

Dm7(♭5) G7 A' Cm 3 Dm7(♭5) 3 G7

Cm C7 Fm A♭7

G7 C

B Ab7 G7

Ab7 G7

A″ Cm Dm7(b5) G7

C7 Fm Dm7(b5)

G7 Cm Dm7(b5) G7

3 3 3 3

2nd Improvisation

A Cm Dm7(♭5) G7 C7 Fm

Dm7(♭5) Fm A♭7 G7 Cm

Dm7(♭5) G7 A' Cm A♭7 G7

C7 Fm A♭7

G7 Cm

B A♭7 G7

A♭7

G7 A'' Cm

A♭7 G7 C7 Fm

Dm7(♭5) G7 Cm A♭7 G7

D.S.

Coda

Dm7(♭5) Cm Cm/B Cm/B♭ Cm/A

A♭7(13/9) G7(13/9) Cm(add9)/G G7(♭13/♯9) Cm(add9)/G G7(♭13/♭9)

CmΔ7(9)/G G7(♭13/♯9) Cm(add9)/G D♭/G C(add9)

名演を探せ!!

SUMMERTIME

ビル・エヴァンス(p)の名演
「サマータイム」

エヴァンス流夏の定番曲は口ずさめるフレイズが満載

夏も盛りを過ぎつつある今日この頃だが(といってもこの原稿を書いている今は真っ盛り)、夏の定番「サマータイム」をお届けしよう。言うまでもなく、ジョージ・ガーシュウィン作曲のフォーク・オペラ『ポーギーとベス』(1935年)の挿入歌で、「夏の間は暮らしやすいよ。魚は飛び跳ねているし、綿の木もよく育ってる、……だから赤ちゃんもう泣かないで」といった内容の、変型ブルースのような子守歌だ。ヴォーカル、インストを問わず、昔からジャズの巨人たちのほとんどが取り上げているが、中でもマイルス・デイヴィスとギル・エヴァンス、MJQのヴァージョンは美しくリリカルだ。対照的に、ジョン・コルトレーン・ヴァージョンは寝た子も起きて泣き出しそうなアグレッシヴなインタープリテーションで聴く者を圧倒する。さて、ビル・エヴァンスの演奏はどうだろう？

譜面を見てみよう。冒頭8小節はチャック・イスラエルのベース・ソロ。5小節目からピアノが絡み、Ⓐの2拍前からⒶいっぱいの16小節がテーマ。Ⓑ〜Ⓔまで4コーラスのアドリブの後、5コーラスにわたるベース・ソロは割愛し、Ⓕの1コーラスのピアノ・アドリブまで掲載している。この後はテーマに戻り、エンディングはAmワン・コードで32小節のアドリブで終えている。

このアルバム『ハウ・マイ・ハート・シングス！』は、セッションの中から歌うような弾んだナンバーばかりが集められたものだけに、この曲も、右手はシングル・トーンでシンプルだが、口ずさめるようなフレイズがたくさんつづられている。Ⓒの7〜10小節目の1拍半フレイズは、最初3度ずつ下降し、次にAmのコード・トーンを起点に上行していく様がスリリングでカッコいい。また、この曲におけるエヴァンスの大きな特徴としては、トニックのAmのところではほとんど左手はF#-G#、つまり、6th-M7thという動きをしていることだ。この動きは左手がコードを押さえるⒹおよびⒺにおいてもずっと維持されている。また、各コーラスの11〜13小節目にかけてのコード感覚も斬新だ。

〈採譜：河本芳子／解説：北原英司〉



「ハウ・マイ・ハート・シングス！」
ビル・エヴァンス
ビクターエンタテインメント
(Riverside) VICJ-60308

♫≒♩♪ (3)

Intro Am6 4

Am6 | A Am6

Am6 | Dm7 | B7

E7(#9) 3 | Am6 3 | Gm6

F#m7(♭5) | Fm7 | Em7 | Am | D7(♭9) | E7(#9) | Am6

"SUMMERTIME"
Music by George Gershwin

営業時間 月〜土 11:00〜18:30 日・祝 11:00〜18:30
玄坂2-10-7
03-3476-5441
03-3476-5475
03-3476-5401
03-3476-5571
〜金10:00〜21:00 ・日10:00〜20:00
03-3409-2671
ます。
31(土)
庫です。
#272XXX
#74XXX
#183XXX
P #224XXX
#218XXX
P #320XXX
#119XXX
●バンドレン
AL(メタル)
フ(メタル)
スター)●メイ
ー、メタル)
ン、トナリン、
シュガール(メ
ソル(メタル)
バローン
ります。
お持ち下さい。
プがオープン!!
プが集合
玄坂
!!
ポート。初
スンを行っ
談下さい。
ラメンコギター
ン実施中
ことのない
スンなので
きます。アド
もどうぞ!
〜20:30
入会金¥5,00
器レンタルあり
は下記ま
557
a-shibuya
aha.co

「サマータイム」
SUMMERTIME played by BILL EVANS (p)

Am6 B Am6

Am6 Dm7 Bm7

E7 Am6 Gm6

F♯m7(♭5) Fm7 Em7 Am D7 E7 Am6

Am6 C Am6

Am6 Dm7

Bm7 E7 Am6

Am6 Gm6 F♯m7(♭5) Fm7 Em7 Am

D7 E7 Am6 **D** Am6

Am6 Dm7

Dm7 Bm7 E7(♯9) Am6

Am6 Gm6 F♯m7(♭5) Fm7 Em7 Am

D7(♯9) E7(♯9) Am6 **E** Am6

Am6 A7 Dm7

「サマータイム」

SUMMERTIME played by BILL EVANS (p)

Dm7 Bm7 E7(♯9) 8va Am6

Am6 F♯m7(♭5) Fm7 8va Em7 Am

D7 E7(♯9) Am6

Bass Solo

F Am6

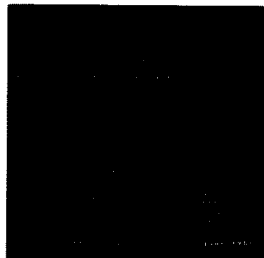
Dm7 Bm7 E7

Am6 Gm6 F♯m7(♭5) Fm7

Em7 Am Dm E7 Am6

MY FOOLISH HEART

Played by BILL EVANS



『ターン・アウト・ザ・スターズ
〜ハイライト』
ビル・エヴァンス・トリオ
weaジャパン WPCR-917

ここからは、ビル・エヴァンス最後のヴィレッジ・ヴァンガード・ライヴ・レコーディング・ボックス・アルバム『ターン・アウト・ザ・スターズ』から1曲、ヴィクター・ヤングの名曲「マイ・フーリッシュ・ハート」を素材にして、ビル・エヴァンスのピアノ・テクニックの真髄を研究してみよう。この曲は、右に紹介しているハイライト盤の2曲目にも収録されている。まだ未聴だという人はチェックしてみよう。

Tempo Rubato

FM7 E7(♭9) [A] A DM7

C♯m7 F♯7 Bm7 G♯7

C♯m7 C♯7 F♯m7 C7 Bm7

Bm7(♭5) E7(♭13 ♯9) In Tempo [B] AM7 Em7 A+7

DM7 Dm7 8va F♯m7 C♯7(♯9)

MY FOOLISH HEART : Words by Ned Washington / Music by Victor Young
(c)1949 by CHAPPELL & CO., INC.
All rights reserved. Used by permission.
Rights for Japan administered by
WARNER / CHAPPELL MUSIC, JAPAN K.K. c/o NICHION, INC.

採譜：河本芳子

して、ビル・エヴ
テクニックの真髄
。この曲は、右に
ライト盤の２曲目
る。まだ未聴だと
してみよう。

F♯m7 B7 E7 EM7 F♯m7 E7

C

AM7 DM7 C♯m7 Bm7 G♯7(♭13)

C♯m7 C♯7(♯9) F♯m7 C7 Bm7

D

G♯m7 C♯7 F♯m7 Dm7 G7

AM7 DM7 C♯m7 F♯7(♭13) Bm7

Am7(♭5) E7 AM7 Dm7 E7(♯9)

E

AM7 DM7 C♯m7 Bm7

G♯7 C♯m7 C♯7(♯9) 8va F♯m7 C7

Bm7 E♭M7 8va Bm7(♭5) E7(♯9)

F

AM7

Em7 DM7 G7

AM7 G7 AM7 B7 E7

EM7 A DM7

G

AM7 DM7 C♯m7 F♯7 Bm7 BmM7 Bm7

G♯sus4 C♯m7 C♯7 F♯m7 C7 Bm7

H

G♯m7 C♯7 F♯m7 Dm7 G7

Tempo Rubato

AM7 A7(♭5) DM7 G7 F♯7 Bm7 B13 B+ Bm7 E7(♭9)

AM7 F♯7 Bm7 G7

E F♯m7 Bm7 E6 B♭M7

AM7

名演を探せ！

エヴァンスのリラックス・ライヴより

BILL EVANS
ROUND MIDNIGHT

ビル・エヴァンスの本当にリラックスしたライヴ盤
『ラウンド・ミッドナイト』からタイトル曲をおとどけしよう。
このアルバム、他にも「ナルディス」や「いつか王子様が」など、
エヴァンスではおなじみのナンバーがおさめられているのだが、
それらがみんな渋ーい味わいを放っているのだ。
超名演とはいいがたいが、逆にビル・エヴァンスの変わらぬ良さがあり、
また、エヴァンスのピアノを勉強するにあたっては格好の素材だと思われる。
いろんな「ラウンド・ミッドナイト」と比べながら勉強してほしい。

『ラウンド・ミッドナイト』ポリドールJ33J-25053(CD)

Am7(♭5) Gm7(♭5) C7(Alt) Fm7(♭5) B♭7 E♭m E♭m/D

©1944 WARNER BROS. INC.
Rights for Japan administered by WARNER BROS. MUSIC (JAPAN) INC., c/o NICHION, INC.

Ebm/Db Cm7(b5) Abm7 Db7 Cm7(b5) Bm7 E7

Bbm7 Eb7 Abm Abm7/Db Db7 GbM7 Ab7 Cm7(b5)

Gb7 F7+/Gb Bb7(b9) Bb7+ Ebm Ebm/D Ebm/Db Cm7(b5) F7

Abm7 Db7 Ebm Ebm/D Ebm/Db Cm7(b5) Bm7 E7 Bbm7 Eb7 Abm

Db7 GbM7 Ab7 Cm7(b5) F7(Alt) Fm7(b5)

EbM7 Cm F7(Alt) Bb7

名演を探せ！
BILL EVANS
ROUND MIDNIGHT

Cm7(b5) F7(alt.) Fm7(b5)/Cb B♭7(alt) Fm7(b5) B♭7+

Cm7(b5) F7 B♭m7 E♭7 A♭m7 D♭7 G♭m7 G♭mM7

Fm7(b5) B♭7(alt.) E♭m7 Cm7(b5) F7+ A♭m7 D♭7

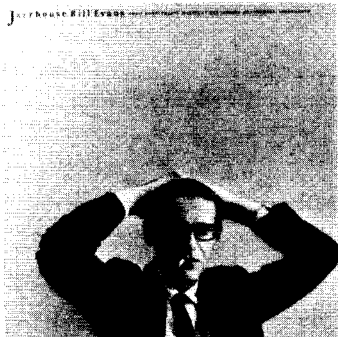
E♭m Cm7(b5) Bm7 E7 B♭m7 E♭7 A♭m7 D♭7

G♭M7 G♭+/A♭ Cm7(b5) F7+ F7 Fm7(b5) B♭7 E♭M7

名演を探せ!

エヴァンスの未発表ライヴよりしっとりバラッド

BILL EVANS GOODBYE



ビル・エヴァンスの未発表ライヴ盤が
ビクター音産より12月16日発売されることになった。
69年録音で、エディ・ゴメス、マーティ・モレルの面々である。
どの曲もエヴァンスではおなじみのものばかりなのだが
その中から、バラッド「グッドバイ」をおとどけすることにしよう。
最近ではウィントンもとりあげたりした名曲だが、
エヴァンスのハーモニーの美しさはこのテイクでも極立っている。
内声の動きなどに注意しながら、弾きこんでほしい。

『枯葉～ビル・エヴァンス・トリオ・ライヴ・アット・モンマルトル』ビクター音産VDJ-1118

Piano

Bass

E♭7 D7 G7 D7 G7(♭13) D7 G7(♭9) Cm7 Cm/B♭

Am7(♭5) A♭7 Cm/G A♭7/G♭ G7/F Cm/E♭ Dm7(♭5) Fm7/C B♭7/A♭ G7(♭9) CM7 Fm7/C

CM7 E7(♯11) Am7 D7(♭5) C7 B♭m7(♭5) E7(♭9) Am Gm C7 Fm7 C7

ゲイリー・カー

©1935 LA SALLE PUBLISHER,INC.
Authorized Selling Agent In Japan: HIGH NOTE PUBLISHING Co.,Ltd.

名演を探せ！
BILL EVANS
GOODBYE

C♭7 B♭7 E♭M7 A♭M7 Dm7(♭5) G7(All) E♭7 A♭7(♭9) A7 A♭7+ G7 D7(♭9)/A

G7(♭9.♭13) 8va Cm Cm/B♭ Cm/A A♭m7(♭5) Cm/G Cm7(♭5)/G♭ G7/F Cm/E♭ Dm7(♭5) Fm7/C

8 Basa 8va

Dm7(♭5)/A♭ G7 ♩=𝅗𝅥 CM7 G7 CM7/G E7(All) Am7 A7(All)

A♭7 A7 A♭7 G7 A♭7 G7

CM7 Am7(♭5) A♭7/E♭ A♭7/D Cm/E♭

E♭°7 G7 Cm6 Dm7(♭5) B7 A♭7

Fm7/G G7 (𝅗𝅥=𝅘𝅥) CM7 Fm/G CM7 F7(♯11) Am7 D+7 C7 FM7/C E7(♭9)

Am7 D7 Gm7 C7 Fm7 C7 B7 B♭7 E♭M7 Fm7/C

FmM7/C D♭7 A7/C D7/C E♭7 A♭7 G7(♭13) A♭7 G7

Cm Cm/B♭ Am7(♭5) A♭m7(♭5) Cm/G A♭7/G♭ G7(♭9) Cm6/E♭ Dm7(♭5) Cm(♭5)

A♭7 Dm7(♭5) G7 CM7 B♭M7 Am7

8va

名演を探せ!!

DANNY BOY

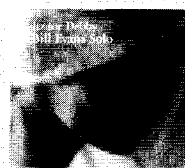
ビル・エヴァンス(p)の名演
「ダニー・ボーイ」

エヴァンスのソロ・ピアノでバラッド・プレイを研究しよう

先月に引き続き、今月もビル・エヴァンスでいこう。先頃発売された『ビル・エヴァンス・ソロ／ワルツ・フォー・デビー』には、リバーサイド・レーベルに残してきた1956年から63年にかけてのエヴァンスのソロ・ピアノが集められている。この時期というのはエヴァンスの活動の中の非常に重要な時期で、初リーダー・アルバム『ニュー・ジャズ・コンセプションズ』を発表したのが56年、マイルス・デイヴィス・セクステットに参加したのが58年、独立してスコット・ラファロ(b)、ポール・モチアン(ds)とのトリオで不朽の名盤『ポートレイト・イン・ジャズ』を発表したのが59年、といったように、デビュー間もない頃から、一躍ジャズ・ピアノ界の寵児となっていく過程にあたっている。

ではこのアルバムの中から、おなじみのアイルランドの名曲「ダニー・ボーイ」を取り上げてみよう。この演奏で珍しいのは、通常のジャズのやり方と違って、テーマ部分を何度も何度も繰り返していることだ。クラシックに「変奏曲」という形式があって、これはひとつの主題(テーマ)のメロディ、ハーモニー、リズム、キーなどをいろいろ変化させていくつかの曲をならべていくものであるが、これにならったのかもしれない。譜面を見てみよう。原曲は16小節で1コーラスが構成されているが、ここでは全編ソロ・ルバートなので、読みやすいように便宜的に小節線を切っている。そのため16小節構成にはなっておらず、ひとつのリハーサル・マークの間を1コーラスとして見てほしい。誌面の都合上4コーラス目の途中までの掲載であるがすべてテーマの変奏で、キーはコーラスごとに、B♭→B→F→B♭と転調しており、また各コーラスそれぞれ細かなリハーモナイズがされている。Ⓐの3小節目3拍目などのような、コードの変わり目のちょっとした内声の変化はいたるところに見られるし、Ⓐ15小節目や17小節目のように、同じコードの中での変化も多い。ジャズ・ピアノの新しい歴史を切り開いたエヴァンスの繊細なプレイをじっくり研究してみよう。

〈採譜：河本芳子／解説：北原英司〉



『ワルツ・フォー・デビィ〜ビル・エヴァンス・ソロ』ビル・エヴァンス
ビクターエンタテインメント
(Riverside) VICJ-60950

A Tempo Rubato

B♭M7 B♭7 E♭

E♭ E♭m6 Dm7 Gm7 C7 F7

B♭M7 B♭7 E♭ E♭m6 D7 G7 G7(♭9) C7 F7

B♭/F E♭6 B♭/D B♭aug/D E♭6 E♭7

B♭/D B♭aug/F♯ Gm7 E♭6 B♭/D B♭aug/D E♭7 Dm7 Gm7 C7

"DANNY BOY"
Traditional

《ジャズライフ11月号は10月12日発売です》

「ダニー・ボーイ」

DANNY BOY played by BILL EVANS (p)

F7 B♭7(13) E♭6 Edim7 F6 Gm7

Gm7 C7(♯11) C♯dim7 Dm7 Gm7 C7 Cm/B♭ F7(♭13) B♭add9/F

B B6 B7 E6 Em

B/F♯ G♯m7 C♯7sus4 C♯7(♭13) F♯7

B6 B7 E/B

BM7 C♯7 F♯7 F♯7(♭9) BM7 E/B Badd9 E

B/D♯ Baug/D♯ E B/D♯ G♯m7 F♯7/E

B/D♯ Baug E D♯m7 G♯m7 C♯sus4 C♯ F♯7sus4 F♯7(13) B7

E6 Fdim7 BM7/F♯ C♯7 B/F♯

F♯7 BM7 G♯m7 G7sus4 Csus4 C F Dm7 D♭7

C7sus4 B♭M7 B♭m F Dm7

G7 C7sus4 F6 Cm7 F7 B♭M7 B♭m6

A7(♭13) D7 A♭7 G7 C7sus4 FM7 C7

F/A Faug/A B♭M7 B♭7 Am7 A7(♭13) Dm7 C7/B♭

「ダニー・ボーイ」

DANNY BOY played by BILL EVANS (p)

F/A Faug/A B♭M7 A7(♭13) D7sus4 G C7(♭13) F Faug B♭6 Bdim7

F/C C♯aug Dm7 G7 Am7 Dm7 Gm7 C7(♭13/♭9)

F6 C7sus4 F7 D B♭M7 Cm7 Fm6 E♭M7 E♭m6

Dm7 Gm7 C7 Cm7 F7

B♭M7 B♭7 E♭M7 E♭m6 Dm7 G7(♭9)

C7(♭13) F7sus4 F7(♭9) B♭M7

F7/E♭ B♭/D B♭aug/D E♭M7 E♭7 Dm7 D7(♯9) Gm7

名演を探せ!!

NEVER LET ME GO

ビル・エヴァンス(p)の名演
「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」

エヴァンス・ソロ演奏の“エヴァーグリーン”

1969年のビル・エヴァンスの名ソロ・アルバム『アローン』から、「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」を採譜した。記憶にあるはずがないのになぜか懐かしい気分にさせる、“エヴァーグリーン”でありながら、追憶の響きがするという、またしても音楽の魔力である。[A]から[G]まで3コーラス半の採譜で、作り込んだ共通部分と真の瞬間即興部分をじっくりと観察できるだろう。アレンジは明晰で、弦楽四重奏のように内声や低声のラインが充実していて、独りアンサンブルの趣きがある([A]の14小節目の左手のメロディや[C]の4小節目の小ワザ的な低音が、メロディを補って歌っているのに注目)。

ここには、いわゆる“唄もの”をバラッドで弾く時のヒントが多く見出される。例えば、[A]冒頭の左手の半音階的なクリシェは、10度の枠組みの中で柔らかくポジションを変えることで奏でられる。手の大きな向きには最適だろう。その他美しい配置が多くあり、[B]の2小節前のDmaj7のコードの配置など、これ以外考えられないくらい力強い豊かな響きがする。[A]の7小節目、[B]の5小節、[C]の11小節目などの メジャー7thコードでよく使われている、6thと7thの「ゆれ」で響きをぼかす、いわゆる“印象派風”の効果が美しい。“印象派風”といえば[B]の1小節前などに見られるブロック・コードのさんざめくような色彩感覚、内声の閃きといった“エヴァンス派”の技法(画法?)も忘れてはならない。

[E]の10小節目からはノン・ストップのメロディの舞いが見られる。清流のように止め処なく流れるようなラインだが、分析すると、パッセージはそれぞれ明確な意思と方向性を持って最適な配置のコード・トーンをめがけて舞い降りているのが確かめられる。[F]の1小節前からのラインの終わりがコード・トーンCに終止している一方で、主メロが他の声部から始まっていて、やはりアンサンブルしている。こうした演奏はジャズ・ピアニストにとってはそのままいい教科書であるが、こんなに美しい教科書もまたとないものだ。



『アローン』
ビル・エヴァンス
ユニバーサル クラシックス&ジャズ
UCCU-5021

〈採譜&解説:鈴木一司〉

Tempo Rubato
Bm7(♭5) F7(♯9) E7(♯9) [A] Am D7 Gm
Gm C7 FM7 Gm7 Am7 Bm7 E7 E♭M7
Am7 D7 Dm7 G7 A♭7 G7 CmM7 F7
F7 B♭M7 Em7(♭5) A7 DM7 Bm7(♭5) E7 B♭7
[B] Am D7 Gm C7

NEVER LET ME GO : Words & Music by Jay Livingston & Ray Evans
©1956 by FAMOUS MUSIC CORP.
All rights reserved. Used by permission.
Authorized to NICHION, INC. for sale only in Japan.

「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」

NEVER LET ME GO played by BILL EVANS (p)

FM7 Gm7 Am7 Bm7 E7 Am D7

FM7/G G7 F/G Fm/G Cadd9 Bm7(♭5) E7

C Am D7 Gm C7

FM7 Gm Am7 Bm7 E7 E♭M7 Am7 D7 Dm7/B

Fm6/G FM7/G CmM7 F7 B♭M7

Em7(♭5) A7 DM7 Bm7(♭5) E7 D Am

Am D7 Gm C7 F6 Gm7 Am7 Bm7 E7(♭9)

Am D7 A♭7 FM7/G Fm6/G F/G G7sus4

Cadd9 FM7 Em7 E7 E Am D7

Gm C7 FM7 Gm7 Am7

Bm7(♭5) E7 E♭M7 Fm7 Gm7 Am7 D7 Dm7

F6/G G7 CmM7 F7

B♭M7 Em7(♭5) A7

D Bm7(♭5) E7 F Am

「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」

NEVER LET ME GO played by BILL EVANS (p)

Am D7 | Gm | C7

FM7 Gm7 Am7 | Bm7 E7 | Am

Am7/D D7 | Dm7/G | G7 | CM7 FM7

Em7 Bm7(♭5) E7 | G Am | D7 | Gm

Gm C7 | FM7 Gm7 Am7 | Bm7 E7 | E♭M7 | Am7 D7

Dm7/G | Dm7(♭5)/G Dm7/G | CmM7 | F7(♯11) Cm7/F

B♭M7 | Em7(♭5) A7(♭9) | DM7 | Bm7(♭5) E7